



ペルー地震被災地ピスコ 救援の遅れにいらだち

ペルーの大地震で深刻な被害が出た南部ピスコ周辺では、救援物資の遅れにいらだちた住民が運搬途中の救援物資を奪ったり、混乱に乗じた略奪が横行し治安が悪化、被災者の生活に深刻な影を落としている。ガルシア大統領は「被災者はもう少しがまんしてほしい。卑劣な行為は厳しく処罰する」と表明した。ピスコではいまだに停電や断水が続いている。ピスコ市中心部でホテルを経営する日系三世のグスタボ・タグチさん(33)によると、地震の直後から、崩壊した薬品店や食品店が襲われるケースが市内各地で多発。「日没後は遠くにいけない」という。

CPNラジオなどによると、ピスコ郊外の幹線道路では住民が道路を封鎖。リマから救援物資の食料や水を満載したトラックを襲い、積み荷を奪う事件が続発した。

AMDA 沖縄支部も医師団派遣 被災者547人診療・医薬品贈る

ガルシア大統領は地震翌日の8月16日に被災地入りし「緊急に必要な物資はすぐに届ける」と表明。同日から警官や軍の応援部隊が派遣され、17日には200人近い医師団が到着。日本からも国際医療援助団体AMDA沖縄支部から派遣された渡久地宏文ルイス医師(沖縄・本部町系ペルー二世・沖縄セントラル病院勤務)が本部(岡山県)の職員谷口氏らが到着、AMDAペルー支部長のアウグスト・ヤマニハ医師らの協力を得て、被災者に医薬品を届けるとともに負傷者547人の治療を行った。

地震後、コロンビア、ボリビアなど隣国からも被災地救援の医師団が到着、ピスコ、イカの中心部の広場には緊急の診療所や救援物資配布のためのテントが並んだ。しかし、郊外への救援は遅れており、ピスコ郊外の女子は地元ラジオに「この一帯には警察官が一人もおらず、略奪し放題の状態が続いている」と指摘。六歳と三歳の娘の手を引いてピスコ中心部の広場まで二時間近く歩き、両手でひとすくいのコメを受けとった主婦のマリア・アンドラデさん(29)は「夫はくずれた自宅からものが盗まれないよう見張っているため動けない。こんな生活は続けられない」と嘆いた。

写真は被災地ピスコで医療活動を行うAMDA派遣の医師団。